

---

# 二挺拳銃の執行者

S o v i l

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

二挺拳銃の執行者

### 【Nコード】

N9344L

### 【作者名】

Sovil

### 【あらすじ】

その日、天坂<sup>アマサカ</sup> 桐人<sup>キリト</sup>は、廃墟にて  
突如崩れてきた天井に潰され死んだはずだった。

しかし、彼が次に目を覚ますと、そこは病院でもあの世でもない、未知の異世界だった。

困惑する彼だったが、そんな彼の前に、二丁の拳銃を携えた一人の少女が現れる。

その少女から、この世界に魔術が存在する事を知らされた桐人は、魔術に元の世界に戻る可能性を見出だし、探すことを決意する。

だが、それは同時に苦難の道への幕開けでもあった

はたして彼は、異世界から無事に帰還することができるのか？

彼の、異世界からの生還を賭けた物語が今、ここに幕を開ける！

## 第0話「夜中の銃声」

闇夜の冷たい風が吹く中、とある人気のない裏路地では異様な光景が広がっていた。

壁に開いた無数の弾痕、  
弾を撃ち込まれた死体、  
地面へ散らばった空薬莖、そして硝煙の臭い。

誰が見ても、争った形跡であるとすぐに分かるほど、その場には殺伐とした空気が満ちていた。

だが、そんな異常な裏路地を、一人、走り抜けている男がいた。

「ハア・・・ハア・・・！」

荒い呼吸と共に、男はひたすら路地を逃げるように走っていく。

顔からして中年であろうかずんぐり太った体躯に貴族の様な派手な色合いの服。

そんな男の額は、汗の珠で埋め尽くされていた。

「くそ！なぜ私が・・・」

狭い路地をドタドタと走りつつ吐き捨てるように男は言つと、二手に別れた路地を左へ曲がる。

そして、現れた一直線の通路を走り抜けようとして、

「っ!!!??」

途端に、足を僅かな段差に取られ男はバランスを一気に崩す。

そして

「ぬわああッ!!」

間抜けな悲鳴と共に、彼は盛大に地面へと叩きつけられた。

肥満体であるが故、衝撃は相当なモノだったらしい。

「ぐう……こんな屈辱ッ……!!」

俯せに転倒した彼は、思ま思ましそうにそう言つと、ゆっくりと腕を立てて起き上がるうとした。

が、その時

「そこまですよ」

突如、彼の頭上に凜とした声が降り注ぐ。

「ッ………!!」

その声にビクリと反応した男は、恐る恐る後ろへと体を向け、その声の主を見た。  
途端に男の表情が憎悪で歪む。

「クソ・・・がッ！」

そう憎々しげに言った男の前に立っていたのは、

一人の小柄な少女だった。

少女は、漆黒のロングコートに、ブーツという身なりで、端から見ればかなり怪しかった。

白銀のポニーテールは腰辺りまであり、その精悍な顔付きは未だ幼さを感じさせる。

しかし、少女が右手に持っていたのは、とても子供が持つような代物ではなかった。

繊細な手が握っていたのは、銀色の回転式拳銃だ。

「人殺し風情が正義の味方気取りとは、随分腹が立つな」

男は、自らの額に向けられた銃口を睨みつけて言う。

だが、そんな言葉など気にしないかのように、

「そう、私は人殺しよ」

さらりと、それも当然のごとく、  
少女は大人に向かって答える。

「こんな事をして・・・タダで済むと思ってるのか!？」

「さあね・・・でも、アンタには  
選択肢があるわ」

男の脅しを流しながら、少女は  
不敵な笑みを浮かべてゆっくり  
口を開く。

「罪を認めて自首するなら、命を取るような事はしない」

「ッ・・・!!」

男は小さく舌打ちすると、急に  
黙り込んでしまった。  
その表情は、どこか迷っている  
ようにも見える。

「生きるか死ぬか、ただそれだけの違いよ？」

銃を向けつつ、少女は諭すように言い聞かせる。  
そんな発言に、男はしばらく悩むそぶりを見せたが、

「・・・そうだな」

ポツリと男は呟くと、地面へ膝をついて、ゆっくり両手を上げた。  
それは、誰が見ても降参しているようにしか見えなかった。

「やっと観念したわね……」

少女は溜め息をつくとき、太股のホルスターへと拳銃を納める。

そして、男へとゆっくり近づこうとした

その時だった。

ドゴツ!!という衝撃音と共に、

突如、少女の足元の地面へ亀裂が入った。

「ッ!!」

少女は即座にバックステップで

そこから離れる。その刹那、地面の亀裂から何かが飛び出した。

地面から唐突に現れた物、それはゴツゴツした石の棘だった。

「……さすがは執行者だ。すぐに力の流れを感じるとは」

そんな言葉が、前方から少女へと浴びせられる。

少女が声がした方を見ると、そこに余裕の表情で男が立っていた。

「……今のはアンタが……?」

「私以外に誰がいると?」

ニタリと、男は口端を歪める。

少女は、再びホルスターから銃を抜き取ると銃口を男へと向けた。

「どつやら、自首する気はないみたいね……！」

「当然だ。私にはやるべき仕事があるからな」

男はそう言つと、悪意に満ちた

表情で少女を睨んだ。本性剥き出しとでも言つたところだろうか。

そんな男を見て少女は、

「……交渉決裂、か」

はあ、と溜め息をつく。

そして男を見据えると、

「なら、アンタを今から執行対象として始末するわ」

そう少女は告げた。

その表情は、先程とは違う冷徹なものだった。

そんな少女の言葉に、男は僅かに動揺したが、

「ッ……やれるものならやってみろ……！」

その声を張り上げると、バツと

右腕を振りかざす。

途端、その動作に呼応するかの  
ように、大量の石の棘が少女の  
近くに現れた。

「チッ！」

少女は、足元に出てきた棘を咄嗟に避ける。  
しかし、回避したのもつかの間、すぐに棘は別の場所から現れた。

「キリがないわね！」

少女は苦い表情を浮かべるも、  
それらを難無く躲していく。  
それは、もはや常人が成せる技と速度ではなかった。

乱雑に出現する棘達は、一撃も  
獲物を掠ることなく、虚しく地面に突き立つ事しかできなかった。

やがて棘の嵐が止むと、通路には再び重苦しい空気が流れ出す。

「チツ……避けるのだけは上手いみたいだな」

男は未だにニヤニヤしていたが、その表情の奥には「明らかな”焦り”があった。

対して少女は、再び不敵な笑みを浮かべると、

「あら……そういうアンタは外すのが得意みたいね？」

と、嘲りの言葉を掛ける。

途端に、男の表情が憤怒によって醜く歪んだ。

「ク……！小娘がああッ！」

怒りのままに叫ぶと、男は自分の正面で腕を真横に振った。  
すると男の正面に、いくつか石の塊が出現した。

手の平サイズではあるが、先程の棘と違い、それらは地面ではなく空中に浮いていた。

「死ねえッ!!」

そんな男の言葉と共に、浮遊していた石の塊は、凄まじい速度で少女へ飛来する。

だが、少女はそれよりも先に行動を開始していた。

少女は空いている左手を腰に回すと、何かを取り出した。

少女が手にしたのは、銀色の大型拳銃だ。

「無駄よ!」

少女は同時に引き金を引く。

刹那、爆音と共に二丁の拳銃達が一斉に火を噴き始めた。

二丁から生み出される弾丸は、

真っ直ぐな弾道を描き飛来する石の塊を難無く粉碎していった。

「馬鹿なッ……!!」

男は驚愕の表情を浮かべると、

一歩後退りする。

「二丁の拳銃……そんなッ!」

明らかに動揺した様の彼は、更に石塊を出現させる。

「じれったいわね……ッ!」

少女はそう吐き捨てると、拳銃を構えたまま走り出した。飛来する石塊を避けながら、両手の拳銃で他の石塊を粉碎する。

そんな動作の繰り返しによって、石塊は徐々に減っていった。

「く、来るなアアッ!!」

男は迫り来る少女を見て叫ぶと、乱雑に腕を振った。

すると、男の正面へ大量の石の棘が現れる。

足止めを考えたのか、現れた棘は通路を塞ぐように生えていた。

「ば、化け物めッ」

男は棘の向こう側から叫ぶように言うと、小動物のごとく一目散に逃げ出した。

「それで逃げれるとでも？」

少女は走りつつ、右手の銃を収めると、新たな弾を左手の大型拳銃に装填する。

そして通路の棘の山に向けて銃を乱射した。発射された銃弾は、棘の鋭い先端を砕いて、ただの石柱へと変えていった。

少女は棘の壁のところまで走ると

一気に跳躍し、削られた断面を

足場にしては更に高く飛躍する。

少女は闇夜の宙を舞う。

そんな彼女の蒼き双眸は、通路を逃げ惑う男を確実に捉えていた。

「次で最後よ」

少女は短く言うと、男の正面へ

ダン！と着地する。

眼前に突然着地してきた少女に、

「うああ！」と間拔けな声を上げた男は、驚きのあまり尻餅をつく。

「クソ・・・私はまだッ！」

男は呻くように言うと、正面を  
向いて、

思わず息を呑んだ。

男の正面には、銃を構えた少女が立っていた。

少女は銃口を男に向けると、

鋭い目で睨みつけた。

男は「ひい！」と短く悲鳴を上げると、

「わ、悪かった！私が悪かった！おとなしく自首するから撃たない  
でくれ！」

と、怯えながら少女を見つめる。

しかし、そんな男を見る少女の瞳は冷たかった。

「もう何を言っても無駄よ」

そう少女は呟くと、右手で回転式拳銃を取り出し、男に向ける。そんな小さな動作だけでも、男は震え上がった。

少女は男を見下ろして、

「……私は執行者。大罪を犯した者を裁く者……」

まるで、詩を朗読するかのようにそう言った。

男は、半ばガクガクと震えている口を開き、

「嫌だ……まだ、死にたく……」

必死に何か言おうとしたが、彼がそれを言い終わる前に、

「地獄で朽ち果てろ」

少女の冷気を帯びた声と共に、

カチリと拳銃のシリンダーが回転した。

その刹那、真夜中の路地に一発の銃声が鳴り響いた。

## 第1話「暗闇と悲劇と」

「ああ、面倒臭い……」

辺りがすっかり暗くなった頃、

アマサカ天坂 キリト桐人は夜の路上でボソリと呟いた。

桐人はコンビニ袋を下げた左手を怠そうに上げると、腕時計の時刻を見してみる。

午後9時30分

健全な学生ならば、外出は控える時間帯である。

「チツ、もうこんな時間かよ」

彼はそう言つと、大きく溜め息をついた。

彼が友人宅を出たのは、かれこれ20分前のことだ。

現在彼は、夏休み中ということもあつて友人の自宅へと泊まりに来ていた。

しかし、彼等が用意していた夜食

(という名のジュースや菓子類)が底をついたため、こつやつて桐人が買い出しに行つてきたのだ。

因みに、お使い役はジャンケンで

公平に決めた。

(まったく、俺もツイてないなあ)

桐人は己の不運を恨みつつも、  
立ち止まって周囲を見渡す。

友人の家が田舎という事もあってか、  
辺りには広大な畑や木々の  
茂みが広がっていた。

都市型住宅地とは違い、一軒ごとの間隔が  
とても広がったり、家も  
和風の家屋が多かったりする。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9344/>

---

二挺拳銃の執行者

2011年10月6日04時08分発行